

白金葎

12 月号



平成 26 年 12 月発行

第 4 6 号

白金葦定例会案内

月例会会報（14／12／19 8名欠 神楽、都鳥）

一月十六日（金） 12:00 ～ 15:00 ア第三学習室 兼題：新年一般

17:00 ～ 19:00 新年会（備前）

二月二十日（金） 12:00 ～ 15:00 ア第三学習室 兼題：山焼、鶯

三月二十日（金） 12:00 ～ 15:00 ア第三 兼題：斑雪^{はだれ}、白子

新年一般の参考句（二月十六日分）

遠方に富士くつきりと恵方道
つなぐ手を離しお降り確かめる
俳句など書いてつまらぬ賀状来る
万力に螺子のありけり去年今年
これやこの出雲の神の太き注連
しゅんしゅんと湯の沸くおもい年新た
またもとの二人となりて雑煮喰ぶ
黒黒とだるまころがる大どんど
親離れの破れジーンズ年始の児
女坂箱根駅伝男根
糸瓜子規大根虚子や初明かり
またなにかさびしくなりぬ初鏡

高橋和子
こしのゆみこ
後藤章
栗栖恵通子
西登喜子
光吉高子
磯田みどり
納富俊光
藤原りくを
久遠順
松田ひろむ
河野南畦

終咲く路地行きどまる八日かな
浅草寺詣で大学諸買つて
七ツ星禁裏の山に神遊び
棧橋やテープ舞ひ立つゆりかもめ
御神楽や市中^{まちなか}はジングルベル忙^{せほ}し
都鳥迷ひ入るなり神楽坂
追ひ越して積荷の鰯に見返さる
ごりら見て動物園の冬の坂
武蔵野の昔見えたる里神楽
隅田川のネオン眠れぬ都鳥
鳩胸を朝日にずらり百合鷗
都鳥言問橋を潜りたる^{みかくら}
御神楽の巫女の緋袴垂髪^{すべらかし}

飯田孝三

増田陽一

光成高志

備後神楽舞台溢るる大蛇かな

義士の日や墓碑銘しるき七十七逝きしゅにゆく

飴なめて童陣取る里神楽

神鶏の脚に環をはめ落葉踏む

山けぶる伊勢茶畑に時雨降る

人來れば人恋ふ声の都鳥

里神楽庭囲ひて楽屋とし

豆腐屋に油の匂ひ霜の朝

眠る山背に信玄の隠し湯に

村長は笛の名手や里神楽

隅田川良き名の橋や都鳥

深川に深川めしや都鳥

大蛇おろちの尾破れて果つる神あそび

冬かもめ濡れゐて真白出雲崎

近江屋に手締の挙がる歳の市（羽子板市）

光 みち

枕して北より響く除夜の鐘

ゆき平に酒を煮切りて雪催

切なさは人の子産んで雪女

祝箸といふ粗品が又当たる

劫火ありしことも忘れじ都鳥

妻恋の募るばかりの年用意

農荒れの神楽の姫の手なりけり

狐火が飛び火してくる里神楽

本棚に「最後の將軍」冬に入る

銀行員等銀河のような眼鏡かけ

何を言う季語を忘れたカナリヤが

負債ごと売りとばしたる火の見かな

思ふ人のたより聞かばや都鳥

都鳥言問橋を一つ跳び

篝火の紅に映えたり神楽面

松村幸一

吉羽多美子

青木啓泰

倉田紀子

武者昭七

里神楽笛ひようひようと風に鳴り

戸隠や天の岩戸の里神楽

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

5 大蛇おろちの尾破れて果つる神あそび

5 鳩胸を朝日にずらり百合鷗

4 農荒れの神楽の姫の手なりけり

3 飴なめて童陣取る里神楽

3 都鳥迷ひ入るなり神楽坂

3 眠る山背に信玄の隠し湯に

3 祝箸といふ粗品が又当たる

3 劫火ありしことも忘れじ都鳥

2 豆腐屋に油の匂ひ霜の朝

2 都鳥濡れゐて真白出雲崎

2 冬かもめ濡れゐて真白出雲崎

2 備後神楽舞台溢るる大蛇かな

2 隅田川良き名の橋や都鳥

2 人来れば人恋ふ声の都鳥

2 妻恋の募るばかりの年用意

2 ゆき平に酒を煮切りて雪催

1 隅田川のネオン眠れぬ都鳥

1 御神楽や市中まちなかははシングルベル忙せはし

1 深川に深川めしや都鳥

紀子

高志

幸一

みち

陽一

多美子

幸一

〃

多美子

紀子

高志

多美子

みち

幸一

紀子

陽一

孝三

多美子

1 里神楽笛ひようひようと風に鳴り

1 武蔵野の昔見えたる里神楽

1 ごりら見て動物園の冬の坂

1 篝火の紅に映えたり神楽面

1 村長は笛の名手や里神楽

1 山けぶる伊勢茶畑に時雨降る

1 都鳥言問橋を一つ跳び

1 浅草寺詣で大学諸買つて

1 神鶏の脚に環をはめ落葉踏む

1 切なさは人の子産んで雪女

1 終咲く路地行きどまる八日かな

1 義士の日や墓碑銘しるき七十七逝きしゅにゆく

1 思ふ人のたより聞かばや都鳥

1 御神楽の巫女の緋袴垂髪すへらかし

1 追ひ越して積荷の鰯に見返さる

1 七ツ星禁裏の山に神遊び

1 近江屋に手締の挙がる歳の市（羽子板市）

1 棧橋やテープ舞ひ立つゆりかもめ

1 枕して北より響く除夜の鐘

1 里神楽庭囲ひて楽屋とし

1 戸隠や天の岩戸の里神楽

1 都鳥言問橋を潜りたる

昭七

陽一

〃

昭七

多美子

みち

昭七

孝三

幸一

孝三

高志

昭七

高志

陽一

孝三

紀子

孝三

紀子

みち

昭七

高志

一句鑑賞

光成高志

銀行員等銀河のような眼鏡かけ

啓泰

掲句、直ぐさま、「銀行員等朝より蛍光す鳥賊の」とく（金子兜太）を呼覚ました。兜太さんは今月檀家寺で講演をした。この句は出なかつたけれど、青鮫の句を自解した。薄暗いところで蛍光灯をつけて皆働いているのを以前見ていた蛍鳥賊にそっくりと見て出来た句だ。掲句は彼らの眼鏡に蛍光灯が映つて恰も銀河のような黒々した反射光が見える様を詠つたものだ。銀河の星々は天井の灯が連なつて映っているのを見立てたのだ。銀行員を揶揄したものとは私は受け取らない。

大蛇おろちの尾破れて果つる神あそび

紀子

もう二十年も前になろうか。信濃町から四谷駅に歩いてゐて、備後神楽がくるというポスターを見つけて、その日にお参りして掲句のような神楽の場面を見た。この神楽はなにしろ、須佐之男命が八俣の大蛇を討ち平らげたことにちなんでいるので動きが激しい。大蛇は竹ひごに和紙を貼り付けた、そう、青森のねぶたのような作り方で出来ている。大蛇が舞台にとぐるを巻いてのたうちまわると舞台に溢れるようになる。そのうちに尾が破れ飛んでしまつて終わりとなる。中七まで読んで神楽だなどと思いきや「神あそび」と平仮名で切つてあるので、意

外性もあり、こういう軽い止めはそこまでの描写を強める効果があるようだ。

都鳥迷ひ入るなり神楽坂

陽一

都鳥こと百合鷗が神楽坂に迷ひ入つてきた。何処から来たのか。外堀どおりに面した神田川から逸れて神楽坂に迷ひ込んだのだ。おそらく花街の路地にまで迷ひ込んだのだ。「迷ひ入るなり」の主語は都鳥ならぬ陽一さんだと直感したが、それでも面白い。神楽坂がよく効いている証拠だ。固有名詞は由来を背負つた重い言葉だ。

隅田川良き名の橋や都鳥

多美子

隅田川の良き名の橋は、言問橋だ。その名の謂れは、伊勢物語にある「名にし負はばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」の歌である。この橋はゲルバートラスという三角に組んだ鉄骨を二つの橋脚から片持ち梁に持ち出して中央で繋げ大きなスパン（支点間距離）をとつたいわゆるゲルバー橋である。ゲルバー橋を言問橋と名付けたわれわれ日本人の奥ゆかしさを味わいたい。里神楽笛ひょうひょうと風に鳴る

昭七

里神楽の笛がひょうひょうと風に乗って鳴り渡り、又風の音も紛れてひょうひょうとと鳴るのである。里神楽の有り様がよく描写されております。「里神楽庭囲ひて楽屋とし」（みち）の句のような神楽でありましょう。

農荒れの神楽の姫の手なりけり

幸一

先の句の神楽はきつとこのような場面を見せているのであろう。面をつけ舞う巫女の手は農作業で荒れた手でしょう。それを覆い隠すことなく舞っている。そういう手を見たことであつたと回想した詠嘆の「手なりけり」の切字がそれを物語っている。

ゆき平に酒を煮切りて雪催

紀子

ゆき平は、土鍋の一種。厚手の陶器製で、蓋、持ち手、注ぎ口がついている。加熱が緩徐で保温性に富み、かゆ、おもゆをたくのに適する。塩を焼く器から起こる名といわれ、在原行平が須磨で塩焼の海女と親しんだ故事になむという。鰯大根などのよく煮込む料理では酒味醂を入れて煮切りアルコール分を飛ばしてはじめて煮込みにかかる。酒を煮きつた鍋底と窓の外の雪催の寒々とした空気が対比されている。日本海側の生活が思われる。よく凝固した言葉からどのような生活を想像するかは読者に委ねている。これが俳句の骨法だ。

一句鑑賞

飯田孝三

飴なめて童陣取る里神楽

みち

一読、昔、村祭りの場面が蘇る。子供たちは、早くから神楽の舞台前に詰めかけ、競い合つて席を占め合う。遅れ馳せの仲良し誰ちゃん、彼ちゃんを誘い入れ、まづ

は、ほっと一息。そういうえば、きまつて飴を口にしていたな。開幕を待つ上気した顔々々が目に浮ぶのである。

陽一

都鳥迷ひ入るなり神楽坂

兼題「都鳥」と「神楽」を詠い込んで練達。近年は都

内の川が蘇り、海鳥が遡る。度々、お茶の水橋から都鳥の姿を見かける。神楽坂にも神田川沿いに飛来するにちがいない。同所は、古くから知られる色街どころ、迷い入るのは都鳥ならぬ千鳥足かもしれない。く「入るなり」の鮮やかな切り上げが軽妙洒脱、都鳥と神楽坂の交響がめでたい。

都鳥言問橋を一つ跳び

昭七

折りしも台東は言問橋に差しかかる。日頃、古典に親昵する作者である、束の間、思いは業平歌物語の風雅の境をゆく。と、突如、足元に立つ都鳥の羽音にハッとす。飛び立つのは欄干からでもいい。一つ「飛び」ならぬ「跳び」が面白い。とび態^{まが}が目に見えるのだ。「飛び」、「翔び」では図にならぬ。瞬間、千幾百年の時空を一つ跳びに帰翔、目前の都鳥の行方を見やるのだ。幸一さんの互選評のように、橋上、行き交う足音に怖じ、羽打つを見るのもいいだろう。歯切れよく、撥ね際やかな口誦がまた快い。

鳩胸の朝日にずらり百合鷗

高志

「鳩胸」は鳥類「反り胸」の具体的表象。鳩は身近で

すぐ目に浮ぶからだ。むべ「鳩胸」と「百合鷗」の並唱が朝日に胸反らす「百合鷗」の連列を具もたらすにもの見せる。橋の欄干でも、岸の手摺でもいい。読んだしの滑らかなリズムが「朝日にずらり」たち並ぶ「鳩胸」に一層照りを添えてやまない。

劫火ありしことも忘れじ都鳥

幸一

「劫火」は、先の大戦で東京下町一体を一夜に焼き尽くし十万余の命を奪った空襲禍とさらに遡る関東大地震の災火。墨田川畔に佇ち、彩り映える塔明りや輝き競う街灯しを見やりつつ、過ぎし阿鼻叫喚の巷をふり返るのである。劫火に失せた家族知人や友達の顔々が目に浮び、思わず唇を嚙む。そうだ、富田木歩が火中に落命したのもこの堤だ。敢えての、ゝありしこと「を」ならぬ「も」に、作者の抑情が滲む。

冬かもめ濡れゐて真白出雲崎

紀子

佐渡を望む壮大な景色を負い、飛び交う鷗たちの白さが目に染みる。海は冬の荒波、座五「出雲崎」がでんと坐り、句格正しく、「濡れゐて」の情韻と情懷がいい。芭蕉の名句「荒海や」を連想させるのである。

深川に深川めしや都鳥

多美子

端的簡明、説明は要らない。「深川」の畳みよろしく、「や」のはたらきが見事。同義三連の感があるやも知れぬが、いやいや、巧まずぬけ俳句の面目躍如を見る。「深

川めし」は浅蜷汁をかけた丼飯、かつての漁師飯。「深川飯」ならぬ「めし」の用字も「や」に連なり鷗の飛び姿と平仄が合う。(出句一覽掲載順)

(平 26・12・22)

一句鑑賞

武者昭七

切なさば人の子産んで雪女

幸一

農荒れの神楽の姫の手なりけり

〃

妻恋ひの募るばかりの年用意

〃

幸一さんの句にはいつも郷愁に似た静かな吐息がこもっている。経てこられた人生の幾山河に対する郷愁であろうか。一句目は豪雪地帯に語り伝えられている伝説を踏まえている。若者にひかれた雪の精霊が夫婦となり子までなしながら去っていかねばならなかったという哀話である。上五の「切なさば」は座五「雪女」にまでかかっていると読むべきだろう。愛し合っても所詮「ひと」は「ひと」、「妖精」は「妖精」であってみれば別れはいつかはくるだろう。それが切ない。二句目、「手なりけり」に驚きと感動がこもっている。舞台で優雅に舞った舞姫はまだかで見ればなんと毎日の農事に荒れた手の持ち主であった。「神楽」とは本来そういうものであったのである。とすれば作者は本当の神楽に出会ったのである。三句目。「年用意」は大掃除をはじめ新年を迎えるための

作業。新年を迎える準備に忙しい時期になると普段に増して妻恋の情が募るのは、今までいつも傍らに元気に立ち働く妻がいたからである。それが今病に伏す。片腕をもがれた以上の切なさに耐えて黙々と立ち働く姿が浮びます。

御神楽や市中はジングルベル忙し

孝三

「御神楽」は年末に宮廷で行われる行事で里神楽とは別。古式ゆかしい伝統行事の場を離れて一步町中にでればけたたましいジングルベルの大洪水。これぞ現代の日本です。

里神楽庭園いひて楽屋とし

みち

なんとも懐かしく楽しい村のひと時。これこそまことの神楽というべし。楽屋覗く子供あり、おひねり飛ぶあり。時には滑稽通り越した演目も。

深川に深川めしあり都鳥

多美子

「深川めし」はアサリのむき身とネギを味噌で煮込んで汁をかけたどんぶり飯。下町の伝統的な名物料理。庶民の伝統料理にかけたいかにも誇らしげな句調がいい。

ハガキ句四十五報管見

飯田孝三

はらはらと落花蔵する山桜

高志

桜咲き満ち、今し、散り初める刹那をとらえて見事だ。

「はらはらと落花蔵する」は、読者を文理を超えた詩

境に誘う。即ち、措辞「蔵する」の仕業である。「咲き満ちてこぼるる花もなかりけり」(虚子)より、深くないか。満開の桜の嵩に、「はらはら」、落花するさまを重ね、無量の哀感を散らす。虚実渾然、囑目(ハガキ掲載写真)をぬけ、桜の本来に迫る。桜は、一木か準ずる一族。人工の改良種より、やはり山桜だ。ア母音とラ子音繰り返しのリズムが、又、いい。

左は大版歳時記掲載の数多の例句中から引く。

海手より日は照りかけて山ざくら

蕪村

山桜白きが上の月夜かな

亜浪

しきりなる落花の中に幹はあり

素逝

揚雲雀高きにありて争へり

高志

「高きにありて」に位。格調の一句。揚雲雀の生態に詳しくないのだが、「争へり」は、空に轉りかわす揚雲雀をいうのだろうか。それとも、天に揚雲雀、地に人間のそれか。後者は無理だろう。轉りは、ひたぶる、恋と娶りの昂り。してみれば、まこと宣なるかな。金の延の棒一本仕立てならずんば、品格が腰折れる。いのちの奥底に觸れ、切ない。

臨月の人の喜ぶ大桜

敏子

うまい。「臨月」と「大桜」が響き合う。めでたい。「人」と「桜」の併称が奥深く、手を取り合い喜んでいるようだ。もうすぐ、満月のような赤ん坊が生まれるに違いな

蟬噪会三月二十七日布施弁天界限7句

勤行の一喝ひびき種物屋

ひらがなのやうな風くる水の春

シヨベルカーにも花粉症らしきもの

切株に坐つて行けといふ日永

日和得し一坪農園豆の花

揚雲雀高きにありて争へり

揚雲雀女ばかりが見上げをり

貝寄せやプリマヴェエラに逢ひに行く

花の枝觸れあふ空の薄にぎり

吉高の大桜 (4 / 12)

はらはらと落花蔵する山桜

臨月の人の喜ぶ大桜

不憫

裕子

哲也

多佳子

修平

高志

春美

孝三

〃

高志

敏子

い。その名は、木花之開耶姫か桜子か。大桜の「大」が頗る大手柄。

シヨベルカーにも花粉症らしきもの

哲也

猖獗を極める花粉症が、遂に、重機の群団を席捲。とは言え、ブルドーザーでは虚実の隙を塞ぎ、クレーンでは外れる。被膜をいくのは、なるほど、シヤベルカー、いや、シヨベルカーだ。音調にもきめ細かな配意がゆきわ

たり、心憎い。構図一幅、俳諧精神が現代社会を席卷する。蓋し、「にも」が巧ざる巧み。

切株に座つて行けという日永

多佳子

参った。蕪村もびつくり、「切株」とはしたり！止め

「日永」が手練。おまけに、爺の形見の煙管を置こう。

揚雲雀女ばかりが見上げをり

春美

「女ばかりが」が勘所。男では句にならぬ。ところで、

その時、男達は何してたんだらう。

勤行の一喝ひびき種物屋

不憫

「一喝」と「種物屋」のひびき合いがツボ。だが、「ひびき」を言うか、言うまいか。

ひらがなのやうな風くる水の春

裕子

「ひらがなのやうな」がうまいが、類想があるかも。

日和得し一坪農園豆の花

修平

情景が見え、心情が手にとれる。はて、「得し」を言うか、咏えるか。

毎回、ご夫妻の句が印象的。お二人の作品は、後広がり立体構造。それぞれ独自の世界をもち、「ぬけ」ている。哲也氏の近詠は、初めてお目にかかった頃から、又、一段と微に敏く、句境が深まった感じ。以外の諸氏作も、さすがのお手並み。ただ、措辞、発想に、往々、いささか先蹤を抜け切らぬ憾みを覚えます。謝々。

(平 21・05・02)

お便り広場（到着順、敬称略）

先日は花束ありがとうございました。今日も壺をあふれてひしめき合いながら、凜と香気を張っています。長生きはするものだと思います。家内に見せてやれないのが、唯一の痛恨。先月と今月の屋根には、こんな*文章を書きました。お読み捨ていただければ幸甚。以上お礼まで。たかし みち様 H26・11・24 幸一

（*「屋根」十月号に「短夜」同十一月号に「サイン」と題して、友子夫人の療養生活を詳しく書かれた文章です。昨夜は一睡もできなかったといわれたのをアビスタでお聞きしたことがある。その所以を書かれてあるのが短夜であり、入院中の友子夫人に「こめ、ん、な」と言いかけながら、幸一さんの水漬と涙とで頬をぬらされた夫人が聖化されたような穏やかな表情でしげしげと瞬いたのが許しのサインのように幸一さんには思えた、というのがサインである。私は思う。人生に是非はない。文章に定着された幸一さんの生活が即文芸作品になっていることを。）

白金葎十一月号拝受しました。卒寿見事な生活振りで。なんとか見習いたいものです。編集後記全くすばらしいです。私のハガキは*大幅に変えて非常に良く出来ているのに感謝感激しています。とにかく元気です。柿木一本だけが甘くなりました。小粒なのが残念です。益々の御活躍を祈ります。（11・30 小山陽也）

（*お便り広場掲載の文面はそのまま入力して変えておられません。）

白金葎11月号の訂正版有難く拝受しました。種々の会合やら季語探訪の旅やら何かとお忙しいのに加えて会誌の編集発送まで細かい心づかいを頂き感謝感激しております。ご夫妻のご健康とご発展をお祈りいたします。次回を楽しみにしております。（12・4 武者昭七）

拝復「白金葎」11月第45号を有難く拝受。感謝。

柴漬の上ゆく鯉や沼の冷え

陽一

田舎の有地川のダムの深みに笹竹の束を沈めて小魚や川海老を採取、捕獲する近所の農家の若き人。驚き感心して眺め、大人になったら俺もやったろうと思っていた頃のことを懐かしく想い出す。しかし、一度も実行することなく、大学は東京に進学し就職し、古里の田舎の生活や柴漬漁法のことですっかり忘れていました。右の名句で想い出す古里の川や山や近所の人々のこと。郷愁に陶酔。次の一句。

植木屋の昼の服鴟目

多美子

田舎の旧家の広い庭の築山と植木屋（庭師）の松の木などの手入れ、古い家の濡れ縁に腰をおろして和菓子とのお茶の茶碗の載った丸い木のお盆、白髪のお植木屋のタバコの一服。向いの畑の畔道の柿木の天辺には鴟一羽。その高鳴きの一声。田舎の晩秋か初冬。長閑な田舎の風

景、平和な一時。老人のユートピア。さらにもう一句。
自然薯の穴はおおむね座棺なみ

啓泰

木棺、石棺、甕棺、陶棺などを連想し、青森の三内丸山遺跡や千葉の加曾利塚、さらには古代エジプトのツタンカーメンの純金製のマスクなども連想。西行（一一一八―一一九〇。七二歳没）の河南町の弘川寺から芭蕉（一六四四―一六九四。五〇歳没）の大津市馬場にあるという義仲寺の各々の墓地や墓石まで連想。そして、我々の句も各々一句づつでも御影石に刻み込みその石碑を志賀直哉記念公園か手賀沼公園の一角にでも建立して観光スポットの色取りの一部にでも加えてはどうか。町興し的一端に協力とはならないのでしょうか。などと空想、妄想へと連想は拡大飛翔。右の啓泰さんの一句からついには妄想に陶酔感謝感謝。皆様のご健筆を祈念。敬白

光成高志様 河村博旨（青江由紀夫）（12・13）

お手数をおかけ致します。よろしくお願い申し上げます。寒さ本格、ご自愛下さい。

光成高志様 (H 26・12・16 PM 4:30 青木啓泰)

追伸…拙句に対していつも好意評をありがとうございます。

（句会に間に合いませんでした。郵便配達遅延のため）

会費同封。古代と万年堂から粗品を送りました。今年末もサボラせて下さい。とにかくボケが進みつつあります。よく居眠りをします。来年こそと思うのですが、な

かなか。皆様のよいお年とすばらしい句作りの年となりますように。

(12・16 小山陽也)

今年一年大変お世話様になりました。二年目の今年は蓮見舟や本郷台吟行句会、久しぶりに自転車に乗り、上州路を空つ風をうけて走った事等楽しい思い出ができた年でした。前回の句作で「人生は後半たのし木の葉髪」と作りました。野球と人生は後半が面白いと聞いたことがありましたので・・・しかし、自分の身におきた事を思うと、おもしろいなどと言ってられないのですが、生かされた命ですから大切にしていこうと思っています。寒さもこれからが本番でしょうからご身体をご自愛され良いお年をお迎え下さい。来年もどうぞよろしくお願いいたします。(12・21 浅野正美)

（正美さん、蒟蒻掘り取材後、大変な急病に襲われましたが、見事に克服され右の手紙を頂きました）

（お礼）例会ではお世話になりました。又、新胡麻と柚子を頂戴しました。カミさんはもちろん大喜びでした、まあ芳しこないつぱい新胡麻を
柚子風呂や齡とつぷり忘れをり

異常陽気の寒さです。ご夫妻共々御身大切に佳い新春をお迎えくださるよう念じあげます。ご健吟のほどを
不一
(平 26・12・22 飯田孝三)

受贈誌（12月号）

初詣たこ焼匂ふ鳥賊匂ふ（彩120号）

平野ひろし

帽子には帽子のぬくみ寒に入る（〃）

〃

雪が降る十年振りの雪が降る（〃）

〃

今年米掲けり宿場の水車小屋（〃）

平山三郎

奥尻の沖に鳥賊火の一直線（飛行雲73号）

駿河岳水

常磐線生活線なり稲稔る

（〃）

〃

時計台五時を響かせ深む秋（あすか12月号）

山尾かづひろ

水澄むや御在所跡の玻璃の数

（〃）

加茂眞智子

こだま（彩主宰平野ひろし&飛行雲主宰駿河岳水抽出）

宵闇の靱殻焼く火燃え上がる（白金葎43月号）

光成高志

白鷺の百羽を連れて稲刈機

（〃）

〃

初あらし半僧坊をはためかす

（44号）

〃

俳窓評論纂

金子兜太の話を聞いた。十二月七日（第一日曜日）は例年の如く、近くの真栄寺に来て俳句の話をする。今年で二十八年目という。私は殆ど出た。いつも一番前で聞く。昨年から本誌を手渡している。今年は車で来られたところに行くわしたので、また名乗って渡した。いやこりやあどーもと言われて尻のポケットにねじ込まれた。いつも同じような話で私は飽きていたが、今年は少し違っていて良かったと思ったので、要約を書いてみる。

真栄寺にある句碑「梅咲いて庭中に青鯨が来ている」の句は、自分がトラック島で見た5万とも言われる戦死者を食いに来る獐猛な青鯨を見た記憶を残している句で、こういう句も含めて、熊本大のギルバートさんが金子兜太の研究をやっている。これに感謝するという冒頭の挨拶の後、アニミズムを体験したという話が主題であった。人間は森の中に発生した。お互いに神を認めていた。お互いに信仰をしておった。自然な形の宗教を持っていた。キリスト教、仏教などがあるが、原始的な宗教に戻ろうとしている。親鸞のは一番アニミズムに近い。人間、原郷に戻れば一番幸せである。赤ちゃんが生まれ出た時、懐かしい思いでその場所を見返ると産婆さんから聞いた。私はアニミズムまでも自覚できるようになった。これが直覚できなくなるとお陀仏である。私のアニミズム体験は秩父で母が私を十七歳で産んだ少年時代、出戻りの叔母ふたりとその子たちと暮す大家族で育った。山の漆にかぶれ易い体質で困った。顔や体がかぶれるのは致し方ないとしても、かぶれた手で小便をするから、ちんこ（幼児のそれ、少年になるとちんぽう、青年ではまら、年をとって私ぐらいになると、ぎゅうない、爆笑）までかぶれて往生した。叔母さんが山に連れって行つて、漆と結婚すればかぶれないと仲介をしてくれた。それ以来かぶれなくなった。これがアニミズムの初体験。なんでも生き物を信仰する。

昭和の初め現金がない。父親の診察の札に物を持ってきてこれで勘弁してくれと言つて、鮎、玉蜀黍、猪の肉、榎櫃の木などを持つてくる。ここにもアニミズム信仰が仄かに見えた。昭和五年の明治神宮遷座祭に踊りを奉納すると言つて唄の文句を作つた。わせだわせだ、どうもろこしは、まらも立たぬのに毛が生えた・・とかこれは金子元春（父）が作つた。祖父は田舎歌舞伎をやつていた。七七五調の台詞や父の五七五の俳句など記紀歌謡の音数律を聞きながら眠つた。父は俳人で医専の同級に水原秋桜子がいた。秋桜子は考えたことを俳句にしようと、自然の真ブラス文芸上の真も詠いたいとホトトギスを飛び出した。虚子はそれに対抗して花鳥諷詠論を唱えた。昭和六年のこと。思つていることを書けるのはいいことだとそれに父も共鳴し、そういう俳人が多かった。「往診の靴の先なる栗拾ふ」がその当時の父の俳句。三十年代四十代の若い連中が家に集まつて句会をやる。終つたら酒を呑み議論をする。よく喧嘩になる。母は嫁入りを持つてきた麵棒を使つて鰻鮓を打つて出す、宴会の対応でてんやわんやしていた。俳人は、人非人 にんびにんだ。俳句をやるとあやう人非人になるから兜太やっちゃあいけないよといわれた。しかし、連中には知的野生があつた。知的とはアニミズムには縁遠い。野生にはアニミズムの素地がある。体で分かっている。知的野生の人た

ちがやるものはいいと思つた。知的野生、漆体験、記紀歌謡この三つに囲まれて大きくなつたのは幸せだったと今思う。高校は水戸に行つた。柔道部に入つた。そこで出羽三太郎に出会つた。飲み屋では、さんちゃんと呼び、私は、とうちゃんと呼ばれていた。このさんちゃんは麻布中出で英語が出来た。授業には出ない。代返をしてもらい落第せずに済んだ。なにをやつていたか。詩を作つたり俳句を作つたりして、投稿をしていた。「白梅や老子無心の旅にゐる」とかいう句を作つていた。こういうのを自由人というのだろう。自由人が俳句を作る。又英語の先生の長谷川朝暮はエドガーランポーの翻訳をやつていた。全く軍部を無視して夜は俳句をつくり、ペルシャの詩の翻訳をしていた。ウマル・ハイヤームのルバイヤートである。享楽主義的な詩である。こういうことを恬淡としてやつておられた人で自由人と思う。自由人の真髓はアニミズムに触れてゐるということ、アニミズムで生きることが一番いいことだ、一番立派なことだと思う。（私はアニミズムで生きることが、もののはれを知つて生きることと同意識であると思つた。）

*小学校五年から中学、高校と同じ学校で付かず離れずの学友だった旧姓天下始子さん、六十五歳の同窓会で俳人であることを知り急接近した間柄です。この度、句集「白猫」を目出度く上梓され私に贈られました。先ずは

ひと言お祝い申し上げます。俳歴四十余年、飯田龍太の「雲母」、広瀬直人の「白露」、現在は井上康明主宰の「郭公」の創刊同人として活躍されています。白金蔭に紹介するために急いで私の好きな句を選び少しだけ感想をつけました。

葉隠れに陽が遊びゐる夏帽子
白猫の恋のはじめの闇夜かな
走者曰くゆくさきさきの蟹逃げよ

（郷里で弁慶蟹をよく追っかけました。小道、崖、溝にいて、つぶらな瞳と紅色のハサミが目には浮びます。）

化石ともなれず真昼のこがねむし

（玉虫色の黄金虫が仰向けに死んでいるのは珍しいことではない。目前の黄金虫を見て、化石となった遺骸を連想できる始子さんはすばらしい。）

ゆく夏の別な谷から十戸見ゆ

蛇笏忌は雲に間遠き谷の音

水音の尖のくらがり鰯雲

吉兆の雪が山から裏口へ

鏡餅湧き水の澄み極まれり

（始子さんのお家は深閑とした山間地だったと思う。俳句のいくつかに、山、谷、水の句があり、佳句が生まれている。山や谷のイメージは蛇笏・龍太に繋がるのかも知れない。）

鳥渡る安芸の入江の小波立ち

春の雁海にほどよきところに住み

火事ありし日の夕空に初燕

塩問屋ありしあたりの竹落葉

寺に汲む水の冷たき原爆忌

（瀬戸内海に面した温暖な安芸の国に生まれ育ち、現在も住み続け、郷土を愛されていて、しっかりと俳句に残されている始子さんです。他にも好きな句は書ききれないほどあります。あなたの喜びは私の喜びです。幸せな年末となりました。）

（12・23 光みち）

旅のうたを読む X — 三好達治 —

武者昭七

旅人よ旅人よ 路をいそげと

海辺をくれば 浪の音

野末をゆけば 蟬の声

山路となれば 啄木の歌

旅人・「山家集」

まるで悲哀に急ぎ立てられるように、あるいは寂寥に迫り立てられるように、海辺を過ぎ、野末を行き、山路をたどる旅人の吐息が聞こえてくる。この詩を読むたびに僕は「測量船」に収められた「峠」という詩の一節を思い出す。

「私は注意深く煙草の火を消した。午後ははや少し遅くなってゐた。そしてこの、恐らくは行き会ふ人もないだらう行く手を思ひ、草深い不案内な降り路を考へると、人人の誰からも遠く離れ

た私の自由な時間も、やはりあわただしく立ちあがらなければならぬのを味気なく感じた。既に旅の日数は重なつてゐた。私は旅情に病の如き悲哀を感じてゐた。しかし私にあつて今日旅を行く心は、ただ左右の風物に身を託して行く行く季節を謳つた古人の心でなければならぬ。もうすぐに海が見えるであらう。それなのに私の心の、何と秋に痛み易いことか！

作者は「旅の時間を鳥のやうな自由な時間」といいながらも焦燥の思いにとらえられ「やはりあわただしくたちあがらなければならぬ」と思う。そして「旅情に病の如き悲哀を感じ」ながらも「旅ゆく心はあの古人の心でなければならぬ」と自らに言い聞かせる。古人とは西行であり宗祇であり芭蕉たちであらう。そびえたつ霊峰のごとき存在！彼らの心のなんと健康であり骨太であることか。作者はそれを十分に知っている。だから言う「それなのに私の心のなんと・・・！」と。

三好の旅は決して彼らにつながるものではなかった。感傷過多と言われるほどにかれのこころは傷つきやすかつたし寂しさに覆われていた。(2014・06・15)

芭蕉の軽み以後(36)

光成高志

寛文十二年に江戸へ下る二十九歳の時出版した『貝おほひ』は、それまでに積み上げた学問を突き破り時代の風潮も取り込んだ晩年に唱える軽みを持った俳諧本とな

っている。芭蕉自身は軽みには無意識であつたであらう。それは二十代に学んだ貞門風に物足りないものを感じて、談林風なものを先取りした傾向があつた。江戸へ出てから、桃青と名乗り、延宝年間には宗因歓迎の百韻に一座するなどして宗因を大いに賛美した。古典文学を踏まえたリ謡曲の言葉をはめ込んだり縁語・掛詞を使い常識をひっくり返す寓言などを自在に使つて発句を作るのは、それなりの学問的蓄積が必要であるが、更にそれを才気煥発に導き出す才能があつて十分となるのであつて、延宝年間の桃青はこの必要十分条件を備えた只一人の俳諧師であつたのだ。延宝四年に帰郷し、その秋江戸に戻つてから、桃青の談林俳諧が活発になつた。延宝五年の「六百番俳諧発句合」(風虎編)、同六年「江戸通り町」(二葉子編)、同年「江戸広小路」(不卜編)、同年「江戸新道」(言水編)、同七年「江戸蛇之鮎」(言水編)などに桃青の発句が発表されて、江戸俳壇では名が通るようになっていた。新井白石は芭蕉より十三歳遅れて生れた江戸中期の学者であるが、この頃牢人をしていて俳諧にも凝つていた。自伝『折たく柴の記』には一言も書いていないが、室鳩巢の書簡集「兼山秘策」の中に桃青などと競りあつた、桃青も歌人にて、李白を学び候て桃青とつけ申候由に御座候と書かれてあることから見てもそのことが分る。延宝八年の冬に日本橋から深川に隠棲した。隠棲

と言ったって、弟子達の援助があつたので、移住と言うべきであるが、それまでの桃青の俳諧活動・作品をよく吟味することが移住の理由に触れるのではないかと思う。延宝五年の正月は門松の句を作ったのであるが、春の句として、一休和尚が比叡の山法師どもから読みやすい大文字を所望されて、金堂から麓の坂本まで紙を継がせて、真直ぐに「し」の字を書きながら駆け下りたという笑話（『一休ばなし』）によつて

大比叡やしの字を引いて一霞（霞）

桃青

という句を作っている。一休和尚の縦に引くしの字を横に一文字に引いた感じに大比叡に霞が横に長くかかつているというのである。

猫の妻竈（へっひ）の崩れより通ひけり（猫妻恋）

桃青

昔男の業平は築地の崩れから忍び通いをしたが、猫はやっぱり猫。恋猫となれば、発情した雌猫が雄猫を求めて、築地ならぬ竈の崩れから通ってくる。伊勢物語の場面を男女逆転させて俗にもじっている。

我孫子日記

11／21例会。 11／26 S O A。 11／30 *松坂。 12／1 *2 三瀬谷
↓伊勢神宮。 12／5 銀座↓泉岳寺。 12／7 真栄寺。 12／9 手
賀沼。 12／12 *3 萱吟行句会（泉岳寺）。 12／19 例会。
*鈴屋の遺蹟は銀杏黄葉照る

高志

古事記伝の版木立てかけ冬温し
*2 笑門の注連縄飾る大台町

山煙る伊勢茶畑に時雨降る

参道の真中に寄せる落葉掻き

夕日差す参道脇の松落葉

神鶏の足に環を嵌め落葉踏む
*3 寸劇を見せる義士の日六年生

義士の日や七十七逝の墓碑

香煙や学童語る義士銘々伝

ぼろぼろの籠手を飾りて義士の日よ

八つ手咲く刃の一字を冠す墓
義士の日やでんでん太鼓陣太鼓

みち 高志
みち 高志
" 高志
一州人 敏子
良子 敦子

編集後記

「彩」の誓子慕情《86》筒井不学さんの文をもっとも、と言いながら読んでいます。今回も同感、久野哲男氏の「山口誓子覚書」を引用しての論、痛快です。青江由紀夫さんの銀次郎日記快調です。良いお年をお迎え下さい。来年もよろしく願います。スペースなくこれだけの後記です。

白金霞 第46号 平成26年12月発行 編集・発行人 光成高志(TEL & FAX 04・7187・1068) 発行所 〒270・1119 我孫子市南新木2-14-17 表紙の題字・加納綾女 写真 12月25日の白金霞